

## コウノトリと共に生きる ～豊岡の挑戦～

兵庫県豊岡市 市長  
中貝宗治氏

豊岡は兵庫県の北部、日本海に面したまちです(図-1)。コウノトリのまちでもあります。コウノトリは、羽を広げると2mもある白い大きな鳥です。かつては日本の各地で見られる鳥でした。里山の大きな松の上に巣を作って、周辺の田んぼや川の浅瀬で餌を捕っていました(図-2)。カエルやナマズやドジョウ、フナ、ヘビも食べる完全肉食の大型の鳥です。しかし、環境破壊によって数を減らし、1971年、日本の野生最後の一只が豊岡で死んで、コウノトリは日本の空から消えました。とどめを刺したのが農薬です(図-3)。絶滅の前にコウノトリを守ろうと飛んでいたコウノトリを捕まえて、豊岡で人工飼育が始まりました。しかし、最初の24年間1羽の雛も孵りませんでした。待望の雛が孵ったのは25年目の春、1989年のことでありました。以来27年連

続で雛が孵って、今、鳥かごの中で96羽が暮らし、そして82羽が再び自由に空を飛び回っています。

2005年、最初の放鳥の映像をご覧ください。このとき野生での絶滅から34年が経過しています。



図-2



図-1



図-3

最初の1羽が飛んだ時、「やった」と大きな声がしました(図-4)。豊岡市長の声でありました。野生復帰の最大のねらいは、「コウノトリも住める豊かな環境を創造すること」。コウノトリは完全肉食の大型の鳥です、あんな鳥でも、また野生で暮らすことができる」と、そこには膨大な量の、そしてたくさんの種類の生きものが存在するはず。そのような豊かな自然は、人間にとっても素晴らしい自然であるに違いない。

もうひとつあります。どんなに自然が豊かになって餌が豊富になったとしても、飛んできた鳥をやみくもに撃ち殺す、そういった文化のところにコウノトリは暮らすことができません。「あんな鳥が近くにいるって素敵だ」、そう思えるおおらかな文化が人間の側になければなりません。そこでコウノトリを空に返そうということを合言葉にして、コウノトリも住めるような豊かな環境、豊かな自然環境と豊かな文化環境をもう一度つくりあげる、それが最大のねらいです(図-5)。

コウノトリは、もうすっかり豊岡の風景に溶け込みました。農家の男性とコウノトリ、よく似ています(図-6)。後ろを走っているのは特急こうのとりです。三江小学校では、3年連続雛が孵って巣立っています。この花火の写真は、コウノトリが人間の生活に適応し、あるいは辛抱している写真です。豊岡の

コウノトリは、日本各地に飛んでおりまして、これまでに40府県273市区町村で飛来が確認をされています。さらに国境を超えるコウノトリも出てきました。豊岡の野外で生まれた1羽のメスが、山口県長門市に行きました。そして、昨年(2016年)の3月、韓国の金海市で発見されました。その後各地を転々として、今年(2017年)の4月、1年1カ月ぶりに帰ってまいりました。

山口県長門市というのは、安倍総理の故郷です。金海市に3月18日に行きまして、その一週間後に日米韓の首脳会談が開かれました。その弟のコウノトリは、鳥取、佐世保に行きまして、韓国に渡りました。また、山口に帰ってきまして、10月28日、再び韓国に渡りました。皆さんご存じのとおり1月2日に日韓首脳会談が行われました(図-7)。



図-5



図-4



図-6

日本と韓国、あるいは日本と中国は、歴史のある一時期を見れば見るほどいみがみ合いますけれども、コウノトリあるいは環境に関して言うと、同じ方向を向いて歩けるはずだ、そう思います。韓国でも一度野生で絶滅しましたが、今年の9月3日に放鳥されました(図-8)。放された8羽のうち2羽は、豊岡のコウノトリの郷公園から送られた二世であります。この放鳥拠点のイエサン郡には、コウノトリの公園があり、ゲストハウスがあります。これはそのなかの展示です。コウノトリの生息地の地図があり、そして、こう書かれてあります。「2005年豊岡、世界で初めて再導入(図-9)。」つまり、韓国のコウノトリ関係者の方々の豊岡に対する非常に深い敬意を強く感じることができます。もちろん、私たちも

また、韓国の人々の野生復帰に向けたその努力に強い敬意を払いたと思います。お互いが尊敬できる分野があるはずだ、そのように思います。

豊岡が開きつつある新たな扉は「環境経済戦略」です。(図-10) 環境と経済は相いれないと固く信じられています。しかし、そうでない分野があります。環境を良くすることによって経済が活性化する。そのことが誘引となって、環境を良くする行動がさらに広がる。環境と経済が共鳴する関係を「環境経済」と名付けて、豊岡ではそれを広げる努力を重ねています。最大のねらいは、持続可能性、環境行動自体の持続可能性です。環境に良いことをすれば良いということは誰だって頭で分かります。しかし、長続きしません。みんな日々の暮ら

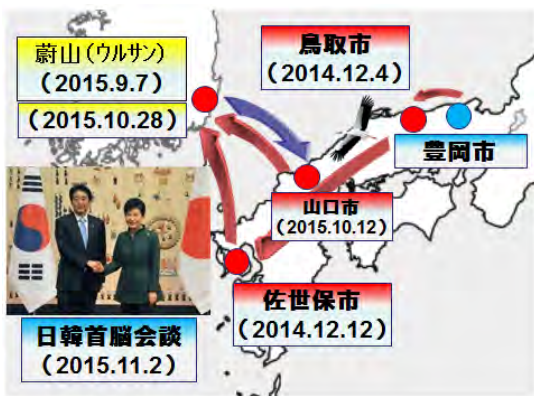


図-7



図-9



図-8

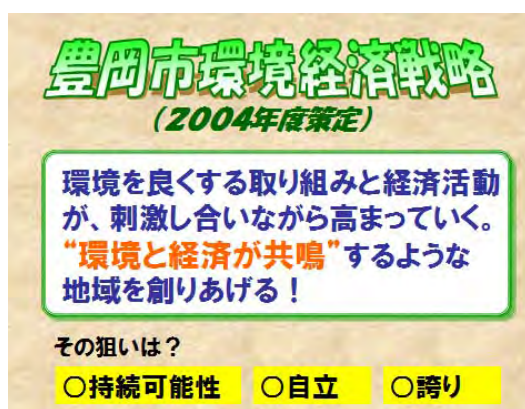


図-10

しがあるからです。しかし、環境を良くする行動は、長く続けないと、そして仲間を増やさないと結果を得ることはできません。そのためには、経済を敵に回すのではなく、味方につけた方が得だ、そういった考え方です。

具体例です。豊岡に10年ほど前に誘致したカネカソーラーテックという太陽電池を作る会社があります。世界中の人々が、地球温暖化対策に貢献しようとして、この会社の太陽電池を設置すればするほどCO2は減ります。この会社は儲かり、雇用は発生し、税収は増えます。環境と経済は共鳴するという一例です。この会社と組みまして、豊岡は市内各地にメガソーラーをはじめ、大規模なソーラー発電所の設置を続けています。環境経済事業の定義は、「利益を追求するものであること、同時に環境に貢献するもの」です。これまでに49事業を豊岡市環境経済事業として認定しています。昨年度は46事業でしたが、その売上総額は95億6千万円。環境経済は、確実に豊岡の経済を支え始めています。

農業もちろん重要です。コウノトリに最後にとどめを刺したのは農業でした。そこで、農業に頼らないコウノトリ育む農法を広げてきました。その作付面積の推移です(図-11)。上が完全無農薬、下が通常より75%農薬を減らしたものです。日本各

地で売られています。店頭価格で、通常のお米より減農薬タイプで5割前後高く、無農薬タイプでは10割前後高く売られています。これはJAの買い取り価格でありますけど、一般米が昨年の数字で5,900円、減農薬タイプ7,900円、無農薬タイプ11,000円、これは30kgです。さらに実際の所得の比較をしてみますと、一般米は作れば作るほど赤字になります。でも減農薬・無農薬ですと、これは後環境支払いなどのお金も含めた金額でありますけど、確実に所得があります。その優位性は明らかになってきています(図-12)。

今年の10月までミラノ万博が開かれていました。日本館は大人気でありました。このテーマは食と農業です。豊岡市から農水省に働きかけをしまして、日本館で流れている映像のシンボルに、コウノトリを使っていただきました(図-13)。日本館にはフードコートがあります。日本食を食べていただくコーナーです。日本から、京料理の美濃吉、あるいはCoCo壱番、モスバーガーなど7店舗が出店しました。ここで使われたお米は、全てコウノトリを育む農法のお米です。24.5トンをお買い上げいただきました。ミラノ万博で紹介されたお米だということを紹介しますと、国内で3割、この期間売り上げが上がりました。

さらに私たちは今、輸出を始めようとしています。

**環境創造型農業**

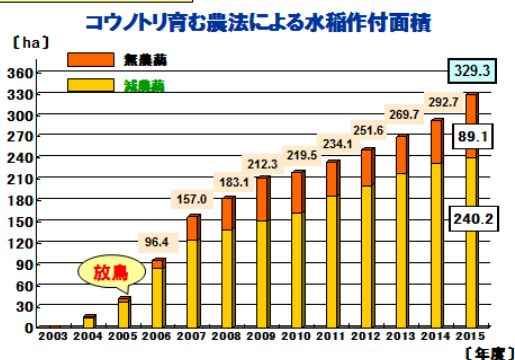


図-11

**コウノトリ育むお米の経営試算**  
【2014年度実績】

種別	実質所得
一般米	△2,110円
コウノトリ育むお米 (減農薬)	45,889円
コウノトリ育むお米 (無農薬)	82,000円

【※10aあたり】

図-12

今月のはじめ、ニューヨークに職員を派遣し、その可能性を探ってまいりました。農産物に関してアメリカにやられっぱなしでありますので、来年度からは本格的にやってみようと考えています。シンガポールでは、来年の1月、伊勢丹スコッツ店で試験販売することが決まりました。もう間もなくミラノにも豊岡のお米を出発させます。検疫が非常に厳しい国でありますので、ごはんパック、レンジでチンとすれば食べられるように加工し、ミラノに送り出すことにしています。アメリカ、ミラノでは、量は稼げないと思いますが、ブランド価値を高める、そういう戦略でニューヨーク、ミラノをねらっています(図-14)。コウノトリ・ツーリズムも盛んになってきました。コウノトリの郷公園にお越しの方は年間30万人程

度です。

コウノトリの野生復帰のおさらいです。横軸に時間があります。コウノトリは1965年から確実に増えてきました。環境創造型農業も広がってきました。湿地再生、人材育成、環境経済、その他も広がってきました。この時間と分野によって広がる、この全て、丸ごとこそが、野生復帰の実態であります(図-15)。それは結局、「人間にとっても素晴らしい環境をつくること」にほかなりません。この事業の事業主体は、一体だれなのか。それは、様々な構成員からなる豊岡という地域そのもの。あるいは豊岡の地域社会です。ここには、市民がもちろんいて、子どもたちがいて、農家もいて、JAもいて、様々な機関もいて、国の機関もあって、また豊岡には住んでいないけれども豊岡の外から共感をして一緒になって努力をしていただいている方々がおられます。その全ての方々からなる豊岡という地域そのものが、野生復帰の主体です(図-16)。自分たちの地域をコウノトリも住めるようなまちにしたいのか、したくないのか、その選び取りは優れて自治の問題でありまして、豊岡はコウノトリと共に暮らすという道を選択いたしました。

アラン・ワイズマンというアメリカ人のジャーナリストがいます、世界的なベストセラー「人類が消えた地球」の著者です。その方が「滅亡へのカウント



図-13

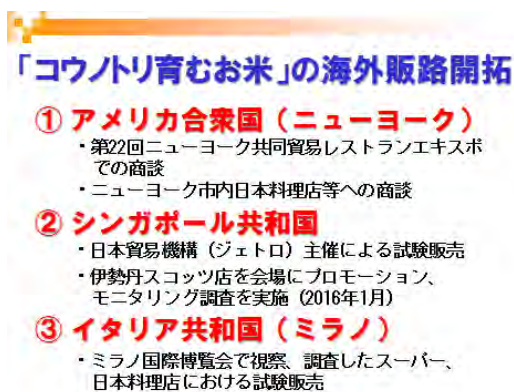


図-14

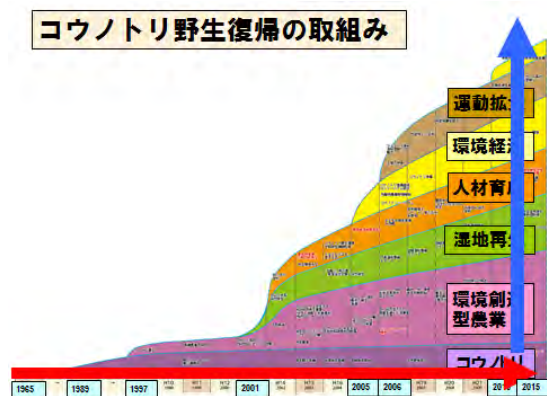


図-15

ダウン」という本を出しています。この本について彼はこんなふうに言っています。「豊岡市にある農家では、殺虫剤をまったく使わないオーガニック米を作っています。その結果、コウノトリが町へと戻ってきたのです。本書のなかで最も希望がもてるストーリーのひとつです」。しかし、今日、各地の報告を聞いて、これ以外にもたくさん、実は希望があるということを私自身実感いたしました。

これまでのコウノトリ野生復帰の取り組みを映像でご覧下さい。

市役所の職員と地元の映像会社が想いをこめて作った映像でありました。結局、私たちを野生復帰に向けて突き動かしてきたもの、それは「命の共感」です。人間とコウノトリと姿形は違いますけれども、同じ命だ。その共感こそが私たちの原動力でありました。日本中が命の共感に満ちたまちになることを期待しながら、私のスピーチを終わらせていただきます。

ありがとうございました。

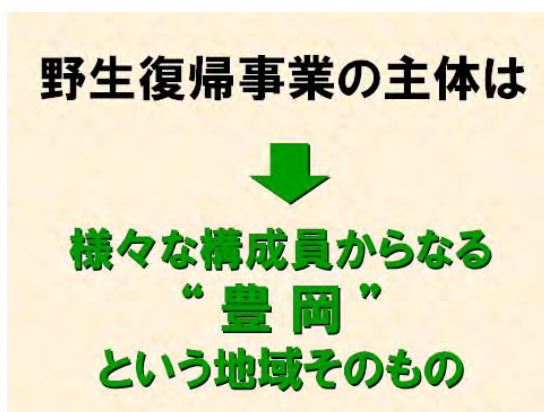


図-16